

# 工科系大学生の性格に関する研究〔第四報〕

鎌 田 英 爾      加 藤 雅 子

A Study of the Personality about the Students of  
KOGAKUIN University.

Eiji KAMATA, Masako KATO

## 1. はじめに

これまでに、工科系大学生の性格について Y-G 性格検査や、クラブ活動の経験調査などにもとずき、様々な角度から研究してきた。今回は第 2 部の学生について、校舎建設のために中断されていた募集が、再開されて 5 年が経過したところでとりあげた。男子学生を対象に、その性格特性の特徴や傾向などについて、1 年生を中心に学科別や第 1 部学生及び他の研究などとも対比して、その相違点や類似点などを比較検討し、分析を行ったものである。

## 2. 調査方法と項目

- 1) 調査対象    工学院大学第 2 部男子学生
- 2) 調査期間    1991 年～1995 年
- 3) 調査人数    512 名

第 2 部 1 年男子

機械系	141 名
化学系	72 名
電気系	133 名
建築系	106 名
合 計	452 名

第 2 部 2 年以上    60 名

(保健体育理論再履修受講者)

- 4) 調査項目

Yatabe-Guilford Character Test.

(以下 Y-G Test と略す)

3. 結果の処理

(1) Y-G Test<sup>1)</sup>

120 の項目からなる設問に対して、三件法によって得た回答を、「12 の尺度」に分類して粗点を計算し、得られた「プロフィール・類型」などを統計的に処理して判断できるように構成されているテストで、信頼性や妥当性が高いために、教員採用試験や入社試験などにも広く利用されている性格検査方法の一つである。

尺度別性格特性

小 ← 粗点 → 大				
情緒安定性因子	抑うつ性小	D	抑うつ性大	情緒不安定性因子
	気分の変化(回帰性)小	C	気分の変化(回帰性)大	
	劣等感小	I	劣等感大	
	神経質でない	N	神経質	
社会的適応性因子	客観的	O	主観的	社会的不適応性因子
	協調的	Co	非協調的	
	攻撃的でない	Ag	攻撃的(あいそが悪い)	
非活動性因子	非活動的	G	活動的	活動性因子
非衝動性因子	のんきでない	R	のんきさ	衝動性因子
内省性因子	思考的内向	T	思考的外向	非内省性外向
非主導性因子 (服従性)	服従的	A	支配的	主導性因子
	社会的内向	S	社会的外向	

(2) Y-G Test プロフィールの五典型と因子グループ<sup>2)</sup>

類型	名 称	因子グループ		
		情緒安定性 E (DCIN)	社会的適応性 A (OC0Ag)	積極性(向性) V (GRTAS)
A型	平均型 (Average Type)	平均	平均	平均
B型	右寄り型 (BlackList Type)	不安定	不適応	積極的 (外向)
C型	左寄り型 (Calm type)	安定	適応	消極的 (内向)
D型	右下り型 (Director type)	安定	適応又は平均	積極的 (外向)
E型	左下り型 (Eccentric type)	不安定	不適応又は平均	消極的 (内向)

(2) Y-G Test プロフィールの五典型因子グループ<sup>2)</sup>

(3) 「E, A, V,」三領域における「l, c, r,」の出現率<sup>4,5,7)</sup>

12 の尺度を三群の因子グループに分類して E, A, V, とし、さらに各領域を 5 段階評価の 3 点を中心として l 型 (左寄り), c 型 (中央), r 型 (右寄り) とする「27 の類型」に細分する。これを五つの典型に当てはめると、A 型は ccc 型, B 型は rrr 型, c 型は llr 型, D 型は llr 型または lcr 型, E 型は rrl または rcl 型とすることができる。また E, A, V, 三領域のう

ちいずれも「c」の範囲については平均型と呼ばれ、その特徴に関しては曖昧であるといえる。そこで先の27類型の中から「c」をのぞき、lとrのみの組合せとその性格傾向から「12のパ

E.A.V. 3 領域によるパターン

群	パターン	E 領域	A 領域	V 領域
I	11-	情緒安定	社会的適応	—
	1-r	情緒安定	—	積極的
	-1 r	—	社会的適応	積極的
II	1-1	情緒安定	—	消極的
	-11	—	社会的適応	積極的
	1 r-	情緒安定	社会的不適応	—
	r 1-	情緒不安定	社会的適応	—
	-rr	—	社会的不適応	消極的
	r-r	情緒不安定	—	積極的
III	-r 1	—	社会的不適応	消極的
	r-1	情緒不安定	—	消極的
	rr-	情緒不安定	社会的不適原	—

ターン」と「I, II, III, の三群」に分類した。

#### 4. 結果と考察 (I) Y-G Test の12尺度別比較 (第一表)

1) 辻岡<sup>3)</sup>による大学生の標準化資料(4136名)(以下辻岡と略す)と本学の2部1年を比較してみると(第1図),客観性(O)活動的(G)を除く10尺度が,いずれも良い方向の性格(D型寄り)を示しており,中でも劣等感(I)神経質(N)以外の尺度に,はっきりと有意差が認められる。

この傾向は尺度の因子グループ別においても,非活動性因子(Ag・G)以外はD型寄りであることと一致している。とくに非内省性外向(R・T)はD型寄りであり,上下各6尺度の差の平均(2.27)をみても,明らかにD型寄りであることがわかる。

2) 2部1年と1部1年(最近5年間のデータ・605名)との比較(第1図),および上下6尺度の差をみても差がなく(第三表),思考的外向(T)がわずかにE型寄りであっただけで,1部と2部の1年についてはほぼ同質な集団ということがいえる。

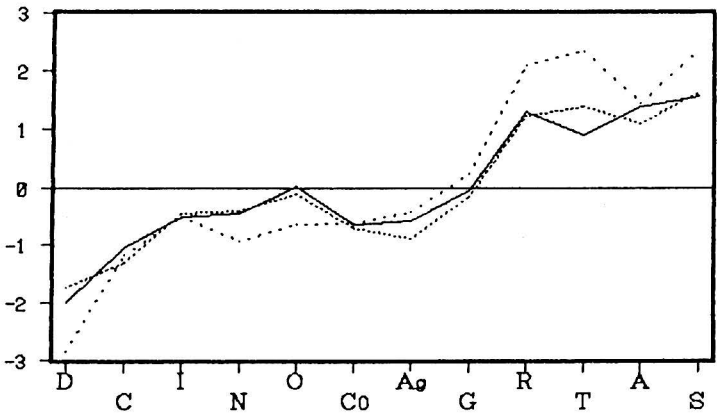
3) 2部の2年以上と辻岡との間では主観的(O)がE型寄り,のんきさ(R)と社会的外交(S)がおおきくD型寄り,外向性(T)支配性(A)の2尺度がわずかにD型寄りであった。又1部と2部の2年以上の間では,まったく差がみられなかった。

4) 2部の2年以上と1年との間では(第2図),主観的(O)に有意差がみられただけで,他の尺度には差がなかった。但しこれに関しては調査数が少ないので,はっきりとしたことはわからない。

第一表 Y-G・Test 尺度

上段………AVG  
下段………STD

尺度	2部 男子 1年 学系別				2部男子		1部男子		辻岡平均	近畿大学	谷嶋ら
	機械系	化学系	電気系	建築系	1年合計	2年以上	1年合計	2年以上	男子	理工学部	首都圏大
D	9.96	8.71	9.19	8.65	9.23	10.17	9.50	9.83	11.23	10.26	8.38
	5.57	5.41	5.57	5.62	5.58	5.71	5.60	5.84	5.51		5.82
C	9.48	8.06	9.35	8.21	8.92	9.12	8.66	9.58	9.98	9.66	8.79
	4.62	4.69	4.72	4.79	4.74	4.62	4.53	4.96	4.99		4.58
I	9.06	8.19	9.00	7.14	8.46	8.12	8.51	7.98	8.97	8.15	8.44
	5.36	4.86	5.62	4.82	5.30	5.44	5.18	4.93	5.52		4.99
N	10.03	8.65	9.45	8.44	9.27	9.78	9.31	8.53	9.72	9.75	8.78
	4.88	5.29	5.17	4.75	5.05	5.13	5.10	5.24	5.35		4.97
O	8.47	8.07	8.20	7.64	8.13	9.62	7.99	8.85	8.11	7.97	7.45
	4.42	4.25	4.08	4.43	4.31	4.07	4.10	4.81	4.38		4.17
Co	7.63	7.42	8.02	7.48	7.68	8.13	7.61	7.49	8.34	8.89	7.97
	4.04	3.71	4.35	4.26	4.14	3.69	4.04	3.84	4.06		3.90
Ag	9.99	10.16	9.92	11.23	10.28	10.92	9.97	10.91	10.87	11.92	10.44
	4.32	4.20	4.07	4.26	4.25	4.08	4.31	4.06	4.25		4.10
G	10.33	10.29	11.04	11.49	10.80	11.02	10.69	10.84	10.85	12.98	11.08
	4.31	4.22	4.41	4.57	4.22	4.79	4.47	4.69	5.12		4.20
R	11.26	10.97	11.27	11.45	11.26	12.48	11.18	12.96	9.96	10.32	12.05
	4.61	4.99	4.75	4.19	4.62	4.29	4.80	4.43	4.85		4.47
T	9.02	9.67	9.01	8.78	9.06	9.25	9.54	10.03	8.16	12.55	10.50
	4.73	4.68	4.38	4.61	4.60	4.15	4.53	4.69	4.62		4.33
A	9.24	9.44	10.02	10.95	9.90	9.80	9.61	10.36	8.52	10.45	9.98
	5.07	4.93	4.83	4.56	4.91	4.78	4.88	4.55	5.53		4.66
S	11.20	11.16	11.46	13.42	11.79	11.92	11.85	12.90	10.23	8.66	12.58
	5.34	5.60	5.30	4.88	5.35	4.97	5.33	5.33	5.48		4.98
(N)	141	72	133	106	452	60	605	147	4,136	641	1082

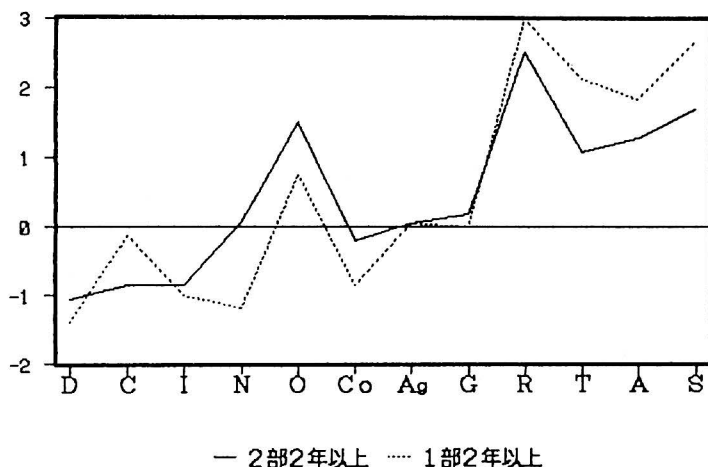


— 2部1年 ..... 1部1年 ... 谷嶋と辻岡

第1図

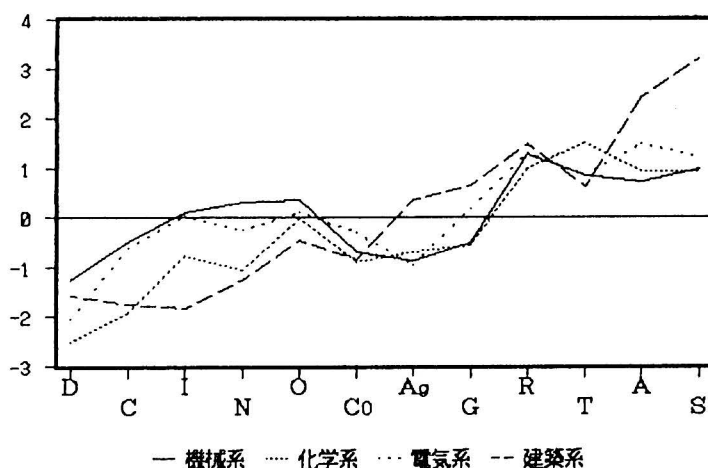
1・2部1年と谷嶋・辻岡との比較

5) 2部1年の学系別と辻岡との比較では(第3図), 全体的に本学生の方が明らかにD型寄りを示している中で, 建築系では(Ag, I)を除いて, 化学系では(G)を除いて, 又電気系では(I, O), 機械系では(I, N, O, G)を除いてD型寄りであった。



第2図

1・2部2年以上と辻岡との比較



第3図

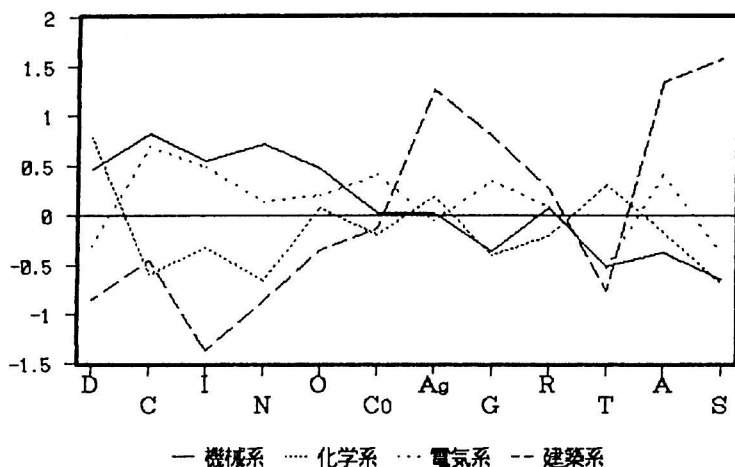
2部1年学系別と辻岡との比較

また因子グループ別では、建築系を除く三学系の非活動性因子 (Ag・G) だけがE型寄りであった。

6) 2部と1部の1年を学系別に比較してみると (第4図), 三つの学系の間には殆ど有為な差はみられず, 建築系だけは (I, A, S) の3尺度について有意に1部の方がD型寄りである。また (Ag) だけは逆に2部の方に有意差が認められた。

## 5. 結果と考察 (2) 五類型別比較 (第二表)

1) 全体の傾向として, 2部1年についてはD類 (安定・積極型) が多く (31.9%) E類が



第4図

1・2部1年の学系別比較

第二表 類型別出現率

	2部 男子 1年								学系別				2部 男子				1部 男子			
	機械系		化学系		電気系		建築系		1年合計		2年以上		1年合計		2年以上		1年合計		2年以上	
	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%
A	4	26	1	11	4	32	4	15	13	84	2	14	26	123	4	26				
A'	10		1		15		5		31		2		26		11					
A''	12	18.4	9	15.3	13	24.1	6	14.2	40	18.6	10	23.3	71	20.3%	11	17.7%				
B	5	23	2	10	6	18	7	22	20	73	1	12	23	90	11	31				
B'	11		6		9		9		35		6		48		8					
AB	7	16.3	2	13.9	3	13.5	6	20.8	18	16.1	5	20.0	19	14.9%	12	21.1%				
C	9	28	5	20	6	24	6	17	26	89	2	8	42	103	7	18				
C'	7		3		3		4		17		2		15		2					
AC	12	19.9	12	27.8	15	18.4	7	16.0	46	19.7	4	13.3	46	17.0%	9	12.2%				
D	9	44	12	21	11	37	15	42	47	144	8	15	65	197	18	54				
D'	25		7		19		22		73		5		94		29					
AD	10	31.2	2	29.2	7	27.8	5	39.6	24	31.9	2	25.0	38	32.6%	7	36.7%				
E	11	20	5	10	8	22	3	10	27	62	3	11	19	92	7	18				
E'	7		3		7		4		21		5		49		4					
AE	2	14.2	2	13.9	7	16.5	3	9.4	14	13.7	3	18.3	24	15.2%	7	12.2%				
(N)	141		72		133		106		452		60		605		147					
	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%				
典型	38	26.9	25	34.7	35	26.3	35	33.0	133	29.4	16	26.7	175	28.9	47	32.0%				
準型	60	42.6	20	27.8	53	39.8	44	41.5	177	39.2	20	33.3	232	38.3	54	36.7%				
亜型	43	30.5	27	37.5	45	33.8	27	25.5	142	31.4	24	40.0	198	32.7	46	31.3%				

少ない (13.7%)。これを1部の1年と比較してみても、最大2.7%の差しか見られず、前述したように1部と2部の1年の間に差は殆ど認められない。

2) 1部と2部の2年以上を比較してみると、2部はA類 (平均型) (+5.6%)、E類 (安定・不適応・消極型) (+6.1%)が多く、D類が少ない (-11.7%)。また典型別では、2部は亜型が多く (+8.7%) 典型が少ない (-5.3%)。

3) 2部の1年を2年以上と比較すると、1年は、B類 (不安定・不適応・積極型) (-3.9%)

第三表 因子グループ別及び上下6尺度の平均

(\*) は辻岡に比べてE型寄りを示す

因子グループ	2部1年男子学系別				2部 男子		1部 男子		辻岡 谷嶋ら	
	機械系	化学系	電気系	建築系	1年計	2年上	1年計	2年上	平均	平均
D・C・I・N	9.63	8.40	9.25	8.11	8.97	9.30	9.00	8.98	9.98	8.60
O・C・O・A・g	8.70	8.55	8.71	8.78	8.70	*9.56	8.52	9.08	9.11	8.62
A・g・G	*10.16	*10.23	*10.48	11.36	*10.54	10.97	*10.33	10.88	10.86	10.76
G・R	10.80	10.63	11.16	11.47	11.03	11.75	10.94	11.90	10.41	11.57
R・T	10.14	10.32	10.14	10.12	10.16	10.87	10.36	11.50	9.06	11.28
A・S	10.22	10.30	10.74	12.19	10.85	10.86	10.73	11.63	9.38	11.28
(N)	141	72	133	106	452	60	605	147	4136	1082
上6尺度の平均	9.11	8.18	8.87	7.93	8.62	9.16	8.60	8.71	9.40	8.30
下6尺度の平均	10.17	10.28	10.45	11.22	10.52	10.90	10.47	11.33	9.77	11.11
上下6尺度の差	1.07	2.10	1.59	3.29	1.90	1.74	1.87	2.62	0.37	2.81

とE類・A類が少なく(4.6%・4.7%),D・C類(安定・適応・消極型)が多い(6.9%・6.4%)。また1年は典型と準型が多く,亜型が少ない。

4) 2部1年の学系別を1年合計との比較でみると,多い類型は電気系(A, +5.5%)建築系(B, +4.7%, D, +7.7%)化学系(C, +8.1%)であり,反対に少ないのは建築系(C, -3.7%, E, -4.3%)電気系(D, -4.1%)である。また典型で全体と大きく異なる学系は,化学系で,典型・亜型が多く,準型は少ない。建築系では亜型が少ない。

## 6. 結果と考察 (3) E, A, V, 三領域におけるl, c, r, パターンの出現率比較(第四表, 第五表)

1) 2部と1部の1年を比較すると, D型タイプではI群(情緒安定・社会的適応・積極的外向)は2部1年のほうが少なく(-6.4%), II- (安定・適応タイプ)に差はみられない(-0.6%)。IIr・lcr(典型的なDタイプ)では, 2部1年のほうが少ない(-6.4%)。またE型タイプではIII群(情緒不安定・社会的不適応・消極的内向)は2部のほうが多く(+3.3%), rr- (不安定・不適応タイプ) rrl・rcl(典型的なEタイプ)についてはほとんど差がみられない。(尚頻度の合計は, 集計の項目がだぶっているために100%を越すことがある)

2) 1・2部の2年以上を比較すると, D型タイプでは2部のほうがII-タイプは多く, (+4.8%), IIr・lcrタイプでは2部のほうが少ない(-4.3%)。またE型タイプではIII群は2部のほうが多く(+7.8%), rrl・rclタイプでも多い(+6.3%)

3) 2部の1年と2年以上の間では, D型タイプでは2年のI群のほうがわずかに多く(+2.4%)その他に差はみられない。またE型タイプでは, III群が(-3.3%), rrl・rclが(-4.6%)と, いずれも1年のほうが少なかった。

4) 学系別を1部1年全体と較べると, D型タイプではI群とII-タイプで化学系が多く(+4.0%, +2.6%), IIr・lcrタイプでは化学系(+3.7%)・機械系(+2.2%)が多く, 建築系(-3.8%)は少なかった。またE型タイプではIII群の機械系(+5.0%)が多く, 建築系(-7.8%)が少なく, rrl・rclタイプでは建築系(-2.1%)がわずかに少なかった。

第四表 12 パターンの出現率

パターン		2部1年				男子学系別				2部1年		2部2年		1部1年		1部2年以上	
		機械	小計	化学	小計	電気	小計	建築	小計	頻数	小計	頻数	小計	頻数	小計	頻数	小計
I	11-	38	103	21	54	38	98	33	100	130	355	17	45	149	448	33	121
	1-r	40		20		34		43		137		16		186		57	
	-1r	25	45.4%	13	50.5%	26	45.4%	24	46.7%	88	46.5%	12	48.9%	113	52.9%	31	50.2%
II	1-1	9		7		11		7		34		2		37		9	
	-11	16	61	8	27	14	65	7	82	45	235	3	23	58	234	9	76
	1-r	5		2		7		21		35		3		14		7	
	r1-	5		0		7		1		13		1		11		5	
	-rr	16	26.9%	6		13	30.1%	33	38.3%	68	30.8%	9	25.0%	59	27.6%	25	31.5%
	r-r	10		4	25.2%	13		13		40		5		55		21	
III	-11	17	63	7	26	14	53	7	32	45	174	5	24	28	165	8	44
	r-1	22		8		19		10		59		11		66		13	
	rr-	24	27.8%	11	24.3%	20	24.5%	15	15.0%	70	22.8%	8	26.1%	71	19.5%	23	18.3%
合計		227		107		216		214		764		92		847		241	
(N)		141		72		133		106		452		60		605		147	

第五表 1crによるD、Eタイプの出現率

		D型タイプ			E型タイプ			頻数
		11r	11-	I群	rr1	rr-	III群	
		1cr			rcl			
2部 男子 1年	機械系	37	38	103	17	24	63	227
	N=141	16.3%	16.7%	45.4%	7.5%	10.6%	27.8%	
	化学系	19	21	54	8	11	26	107
	N=72	17.8%	19.6%	50.5%	7.5%	10.3%	24.3%	
	電気系	30	38	98	14	20	53	216
	N=133	13.9%	17.6%	45.4%	6.5%	9.3%	24.5%	
2部 男子	建築系	22	33	100	9	15	32	214
	N=106	10.3%	15.4%	46.7%	4.2%	7.0%	15.0%	
	1年合計	108	130	355	48	70	174	764
	N=452	14.1%	17.0%	46.5%	6.3%	9.2%	22.8%	
	2年以上	14	17	45	10	8	24	92
	N=60	15.2%	18.5%	48.9%	10.9%	8.7%	26.1%	
1部 男子	1年合計	174	149	448	55	71	165	847
	N=605	20.5%	17.6%	52.9%	6.5%	8.4%	19.5%	
	2年以上	47	33	121	11	23	44	241
	N=147	19.5%	13.7%	50.2%	4.6%	9.5%	18.3%	
2部 男子	近畿大学	135	136	352	77	122	266	913
	N=641	14.8%	14.9%	38.6%	8.4%	13.4%	29.1%	

## 7. 他の研究との比較

他の類似した研究をいくつか取りあげて比較検討を試みた。データが少し古いものがあり、直接比較するのは少し問題があるようにも思えるが、この点に関しては後述する。

1) 森脇<sup>6)</sup>、山田等<sup>4,5)</sup>により、近畿大学第2部理工学部の学生を対象にした研究と比較してみた。これらはいずれも1962-1964年頃の調査研究なので一括して比較を行った。

a) 尺度別の比較では、(D, C, N, Co, R, S)については本学2部1年生の方がD寄りであった。これを因子グループ別について見ると、(D・C・I・N), (O・Co・Ag) 因子については、近畿大学の方がE型寄りであった。上下6尺度をまとめてみると、上6尺度では本学1年生の方がD寄り、下6尺度についてはE寄りであった。総合すると本学1年生はD型寄りであ



あるが、その差はわずかである。

b) lcr による D・E タイプの出現率でみると、D 型タイプでは II- および I 群については本学 1 年生の方がよい傾向にあり (+2.1%, +7.9%), llr・lcr については、逆に近畿大学の方がわずかに多かった (+0.7%), E タイプではすべて本学の方が少なかった。(-2.1% ~ -6.3%)。即ち llr・lcr を除いてその他は本学の方が D 型寄りの良い傾向にあるといえる。

2) 同じ近畿大学のデーターを本学の 2 部 2 年以上と比較してみた。

a) 尺度別については、(D, C, I, Co, R, S) については本学の方が D 型寄りである。これは 1 年生の劣等感 (I) と 2 年以上の神経質 (N) の尺度が入れ替わっただけであるといえる。これを因子グループ別でみると、(Ag・G) (R・T) 因子については近畿大学の方が D 型寄りであった。また上下 6 尺度に分けて比較してみると、上下 6 尺度ともに近畿大学のほうがわずかではあるが D 型寄りであるといえる。

b) lcr による D・E タイプの出現率でみると、D 型タイプでは本学の 2 年以上のほうが全てに多く、E 型タイプでは rrl・rcl タイプがわずかに多いほかは、本学のほうが少なく、全体としては本学生の方がよい傾向にあるといえる。

3) 谷嶋らによる研究<sup>13)</sup>(首都圏大学生)と比較してみた。尺度別については協調性 (Co) を除いて他はすべて本学 2 部 1 年生のほうが E 型寄りであり、そのなかでも (D, O, R, T, S) では有意差がみられた。また 1 部 1 年生との比較でも同様の傾向にあり、気分の変化 (C), 協調性 (Co) がわずかに本学の方がよいほかはすべて E 型寄りであり、(D, N, O, Ag, R, S) では有為な差を示している。

辻岡<sup>3)</sup>と谷嶋ら<sup>13)</sup>との比較においても、活動性 (G) を除いて、他は全て谷嶋らの方が D 型寄りに有為差を示している。

谷嶋らによると、特に (D, R, T, A, S) の 5 尺度については、辻岡の標準点とのズレが大きいと指摘している。そのことはそのまま本研究にも関わってくる事であるが、詳しい検討は次回の研究で行いたい。

## 8. ま と め

1) 12 の尺度については、辻岡に較べてこれまでの研究と同様に、かなり D 型寄りの良い方向にあるといえる。この傾向は 2 部と 1 部の 1 年生及び 2 年以上についても同じである。2 部の 1 年生と 2 年以上の間では、(O) 尺度だけが有意差があり、1 年生の方がより客観的であるといえる。

これは平均年齢からも推測できる。1 年生については 1 部 (AVG 18.85 才, STD 0.85) 2 部 (AVG 19.72 歳, STD 1.83) で、最高年齢は 24 才, 32 才と差があるものの、平均年齢には殆ど差がみられない。2 部は勤労学生が減少してきた結果、1 部と殆ど変わらなくなっていることを示しているといえる。また 2 年以上についても同じことがいえる。(1 部 20.27 歳, 2 部 21.06 歳)

第六表-1 Y-G・Test 尺度グループ間の検定

(+) は右側から見てD型寄りを示す    \*\*\*    0.1%  
                                             \*\*    1%  
                                             \*    5%  
                                             Δ    10%

	2部と辻岡		2部と1部		2部	1・2部1年と谷嶋	
	1年合計	2年以上	1年合計	2年以上	1年と2年以上	1部1年	2部1年
D	(+)***(+)		(+)		(+)	***	**
C	(+)***(+)			(+)	(+)	(+)	
I	(+)Δ	(+)	(+)				
N	(+)Δ		(+)		(+)	*	Δ
O		**			(+)***(+)	*	**
C0	(+)**	(+)			(+)	(+)Δ	(+)
Ag	(+)*			(+)	(+)	*	
G		(+)	(+)	(+)		Δ	
R	(+)***(+)***(+)					***	**
T	(+)***(+)***(+)		Δ			***	***
A	(+)***(+)*		(+)		(+)		
S	(+)***(+)					**	**

第六表-2

	2部1年学系別と 辻岡平均				2部1年学系別と 1部1年学系別			
	機械系	化学系	電気系	建築系	機械系	化学系	電気系	建築系
D	(+)	(+)***(+)***(+)***	(+)***	(+)***		(+)	(+)	(+)
C	(+)	(+)***(+)		(+)***	Δ	(+)		(+)
I		(+)		(+)***		(+)		(+)***
N		(+)Δ	(+)	(+)***		(+)		(+)Δ
O		(+)		(+)				(+)
C0	(+)*	(+)*	(+)	(+)Δ		(+)		(+)
Ag	(+)*	(+)	(+)**				(+)	**
G			(+)	(+)			(+)	(+)Δ
R	(+)**	(+)Δ	(+)**	(+)***(+)			(+)	(+)
T	(+)*	(+)**	(+)*	(+)		(+)		
A	(+)Δ	(+)	(+)***(+)***				(+)	(+)**
S	(+)*	(+)	(+)**	(+)***				(+)**

これを学系別にみると、(第六表, 第3図, 第4図) 辻岡との間では, かなりの項目が有為な差をもって全てD型寄りの傾向にある。また1・2部1年生相互の学系別での間には, 建築系の4尺度 (I, Ag, A, S) を除くと殆ど差がみられない。

また1・2部2年以上相互の間にも殆ど差がみられなかった。

2) 尺度を6項目の因子グループ別にみると, 更に傾向がはっきりしてくるわけだが, 辻岡との比較では, 2部1年生と建築系以外の3学系において (Ag・G) 因子だけが非活動性を示し, 2部2年以上の (O・Co・Ag) 因子が, 社会的不適応傾向を示し, その他は全てD型寄りであった。

1・2部1年生の間にも殆ど差がなく, 1・2部の2年以上では2部の2年以上のほうがはっきりとE型寄りである。

3) 類型別で目につく事は, 2部の1年生と2年以上の間では, C, D類は1年生に多く, A, B, E類は2年以上に多い。1年生はやや情緒的安定・社会的に適応であるといえる。

1部1年生と2部1年生の間には大きな差がないが、1部2年以上については、他に比較してC・E類が少なくD類が多い。これは1部で再履修を受講する学生は、2部に比較してやや積極的なものが多いといえるかもしれない。

4) lcrによるD・Eタイプを見ると、学系別ではここでも建築系は1部の学生像に類似している。D型タイプでは全てが低くD型寄りである。llr・lcrタイプでは建築系がいちばん低い。II-ではあまり差がなく、I群は化学系に多い。E型タイプでは建築系のIII群が少ないが目立っている。

辻岡にはlcrに関するデータが無いので比較することができないが、他の資料から推察するに、やはり本学の方がD型寄りで良い傾向を示すものと考えられる。

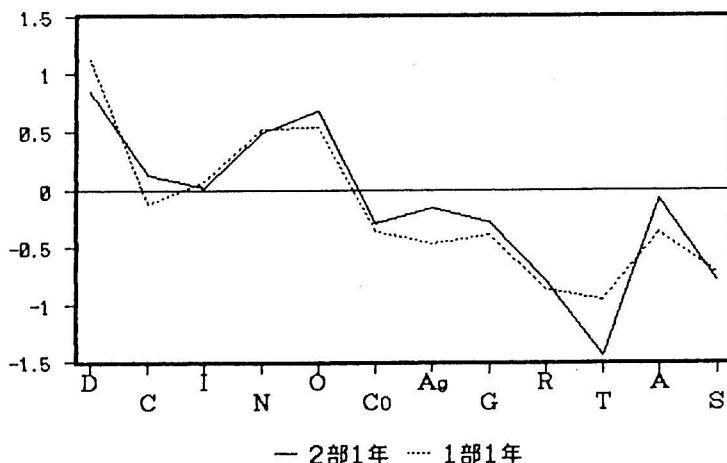
5) 近畿大学との比較では、本学2部1年生は尺度別では(D, C, N, Co, R, S)がD型寄りであり、因子グループ別では(D・C・I・N), (O・Co・Ag) 因子がD型寄りである。ということは本学1年生のほうがやや情緒的には安定で、社会的適応性があり、活動的で積極的だが、衝動的であるといえる。

また2部2年以上では(Ag, R, T)の尺度だけがD型寄りであり、やや活動的で積極的だが内省的で情緒的には少し不安定であるといえよう。

lcrタイプの出現率では、2部1年生の方がI群が多く、rr-とIII群が少ない。2部2年以上ではII-とI群が多く、rr-とIII群が少なく、いずれも本学生の方がよい方向の性格を示しているといえよう。学系別でもこの傾向は変わらない。

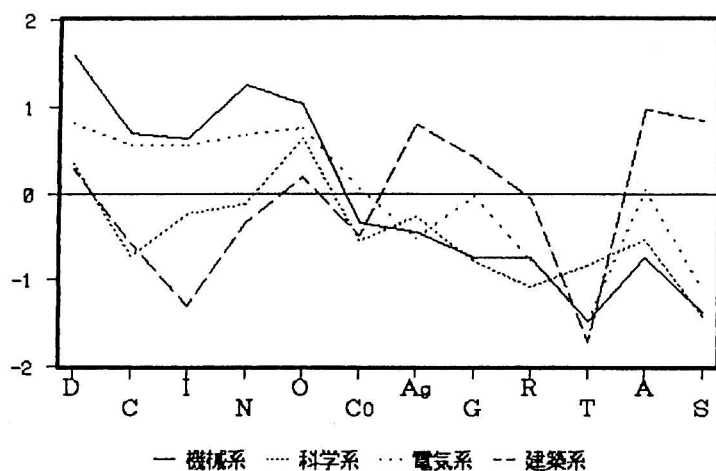
6) 谷嶋等<sup>13)</sup>の研究との比較では、辻岡との比較とはまったく異なる結果がみられる。(第六表、第5図)

まず2部1年生との比較では、協調性(Co)を除いて他の11尺度は全てE型寄りであり、中でも(D, O, R, T, S)の5尺度では、はっきり有意差を示している。また1部1年生と



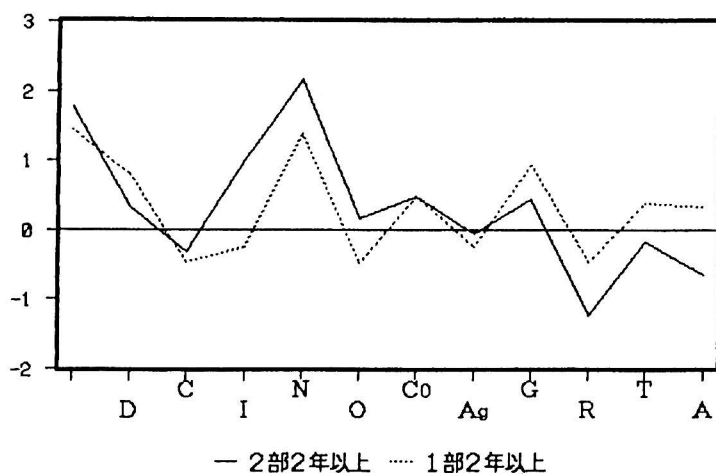
第5図

1・2部1年と谷嶋との比較



第6図

2部1年学系別と谷嶋との比較



第7図

1・2部2年以上と谷嶋との比較

の比較では、さらに (N, Ag) 尺度も有意に E 型寄りであった。

2部1年生の学系別では、(第6図) かなりばらつきがみられるが、建築系だけがやや谷嶋等に近いといえる。

しかしこれらを辻岡との比較でみるならば、谷嶋等と本学生とはより類似した傾向にあるということがいえよう。更に上下6尺度別では、谷嶋等より D 型寄りの方向にあるのは、上6尺度では化学系と建築系、下6尺度では建築系と1部2年以上であるが、その差はいずれもわずかである。それは上下6尺度の差を見ると、D 型の傾向は吸収されて、いずれも E 型の傾向になってしまうことでもあきらかである。

谷嶋等も研究半ばというところで、はっきり結論づけていないところもあるが、本学との差は工科系と文化系（推定）との違いによるものではないかと思われる。

7) 以上のような結果から言えることは、2部1年生と2年以上の間、さらには1部1年生と2部1年生との間には殆ど差がみられなかった。わずかに2部1年生の建築系だけは、1部の建築系に較べてわずかにD型寄りであったにすぎない。また2部学生は、尺度別ではやや劣等感が大きく非活動的であり、さらに2部1年生はやや客観的な見方が出来るようにも思われる。

8) 辻岡のデータとの間に大きな差が生じているということは、谷嶋等の指摘にもあるように、約40年間という年数の差の結果なのかもしれない。戦後50年を経過した今日、その間の予想もできないほど激しい社会の変化によって、生活環境はもちろんのこと、人間の言動や性格などが大きく変化してきているのはあきらかである。したがって現在各種の採用試験などに利用されているYG性格検査の判定基準についても、時代に併せて早急に改訂されなければ、各方面に大きな影響をもたらすのではないかと考える。

## 註

- 1) 辻岡美延「新性格検査法」(Y-G性格検査実施・応用・研究手引) 日本の心理テスト研究所 1982年。
- 2) 前掲 1) p. 21
- 3) 前掲 1) p. 258～p. 262
- 4) 山田久喜「矢田部・ギルフォード性格検査による1・2部学生の性格特性の比較(1)」近畿大学職業科学研究紀要NO. 3 1962年。p. 37～p. 44
- 5) 山田久喜「理工学部学生に課した矢田部・ギルフォード性格検査の結果について(3) 大学芸文第5巻1号 1964年。p. 1～p. 19
- 6) 森脇 勤「Yatabe-Guilford 性格検査による27類出現傾向より見た本学一般学生及び運動部選手の性格Patternについて」大阪体育学研究NO. 2。1964年。p. 54～p. 62
- 7) 森脇 勤「SportsにおけるPersonalityをめぐる問題(Sports manのCharacter Patternを中心として)」近畿大学 1979年。p. 1～p. 17
- 8) 鎌田英爾「工学院大学新入生のYatabe-Guilford 性格検査法による性格」工学院大学研究論叢第6号 1967年。p. 83～p. 120
- 9) 鎌田英爾「性格と身体活動への興味に関する研究(本学学生について)」工学院大学研究論叢第18号 1980年。p. 33～p. 76
- 10) 鎌田英爾「工科系大学生の性格に関する研究(保健体育理論再履修者の性格)」工学院大学研究論叢第27号 1989年。p. 127～p. 144
- 11) 鎌田英爾「工科学系大学生の性格に関する研究(第二報) 工学院大学研究論叢 第28号 1990年。p. 119～p. 135
- 12) 鎌田英爾「工科学系大学生の性格に関する研究(第三報) 工学院大学研究論叢 第31号 1993年。p. 163～p. 179
- 13) 谷嶋・斉藤・福田「Y-G性格検査の信頼性に関する研究(1)」(プロフィールの判定基準について) 日本体育学会第46回大会「大会号」p. 239～p. 240